

2021 年（令和 3 年）  
7 月号（No. 914）

公益社団法人  
**日本山岳会**  
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

会員の会報購読料は年会費に  
含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>  
e-mail ● [jac-room@jac.or.jp](mailto:jac-room@jac.or.jp)

## 令和3年度通常総会をオンラインで開催 歳入も予算執行も減り、黒字に

令和3年度通常総会が6月19日、東京・四谷の主婦会館プラザエフで開催されたが、新型コロナウイルス感染防止のため出席人数を制限し、総会の様子はオンラインで配信した。「令和2年度事業報告」「令和2年度決算報告」「定款施行細則改正」「令和3・4年度役員選任」が審議され、いずれも原案どおり可決、承認された。

今年の通常総会は昨年が続いて会場出席者を少人数に制限し、オンラインでの開催となった。

新型コロナウイルス感染防止のため、出席者は全員マスクを着け、3人テーブルにひとり掛けとし、役員や関係者など30人近くが出席した。また、オンライン会議アプリZoomのウェビナーを使い、全国に配信。当日は41名の閲覧にとどまったが、後日、Youtubeで配

信を行なった。

### ■古野淳会長の挨拶概要

冒頭、古野淳会長より挨拶があり、いくつかの報告や方針が示された。

委員長と理事との関係についての説明および理事と委員長や支部長との兼任について説明があった。また、会員名簿の発行、パワハラ防止法の策定、第3号議案である定年の延長や役員の任期について

説明があった。

議員立法として動き出した「山岳基本法（仮称）」については、「高い理念のもとに、バランスの良い法律制定を期待したい」と述べ、最後にJR東海が建設するリニア中央新幹線工事の環境破壊の問題



総会開会に先立って挨拶する古野淳会長

## 目次

令和3年度通常総会をオンラインで開催 歳入も予算執行も減り、黒字に ……	1
支部長が代わりました ……	5
さんけん通信 ……	8
地域発「山の日」レポート⑩東海支部 ……	9
連載 島の山旅への誘い⑦ ……	10
支部だより 千葉支部 ……	13
新入会員 ……	13
図書紹介 ……	14
会務報告 ……	17
ルーム日誌 ……	18
会員異動 ……	18
INFORMATION ……	18
編集後記 ……	19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間  
★新型コロナウイルス感染防止対応のため、当分の間、取扱時間を短縮します。平日13時～20時

### 《審議事項》

#### ■令和2年度事業報告・決算報告（第1号、第2号議案）

本年度の総会出席者は27名。委任状提出者は544名、議決権行使書提出者は2273名で、出席者と合わせて2844名となり、現在の会員数の4442名の過半数を上回っているため、総会は有効に成立するという報告がされ、議案審議を開始した。

令和2年度事業報告は永田弘太



総会の模様は、オンライン会議アプリを使って全国に配信された

郎・総務担当常務理事より、同決算報告は古川研吾・財務担当常務理事より、それぞれ説明があった。

### 【事業報告】

令和2年度の事業は、新型コロナウイルスの影響が大きく、多くの事業が中止、延期もしくは規模を縮小しての実施となった。

本部ルームは開室時間や利用時間を短縮し、人数制限をするなど

会員に不便をかける結果となった。また、委員会や理事会などの会議のほとんどがオンラインで行なうようになった。年次晩餐会をはじめ、多くの行事も中止となった。支部では、「夏山フェスタ」など大きなイベント、障がい者支援登山、家族登山など、密を避けられない公益事業の多くが取りやめとなった。

会員の登山活動も制約を受ける時期が多かった。ことに登山教室や講習会などが開かれなかったことは、入会者増を図る上でも痛手だった。

ただ、オンラインでの講演会や講習会、会議が可能になったことは、会務や事業活動の一つのあり方として新しい道が拓かれた。

なお、本会の会員数は4514

名、準会員を含めて4786名となり、昨年より約100名が減少した。高齢化による減少傾向は続いており、入会者を増やすことが不可欠である。

### 【決算概況】

#### 【収支決算】

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症が全国で拡大し、感染防止の観点から本会の事業活動は非常に厳しい制約を課された1年であった。事業活動が思うように進められない環境の中、事業費は前年度を大きく下回る結果となり、赤字ではあるが、内容的には不本意な結果となってしまった。

一般正味財産増減の部については、経常収益合計が8477万4000円で、対前年度比89万9000円減少し、経常費用合計は7703万円となり、対前年度比1470万6000円減少した結果、当期経常増減額、当期一般正味財産増減額は774万4000円となった。対前年度より1380万6000円の改善となった。指定正味財産増減の部には、寄附者により使途が指定されている寄附金を142万3000円計上し、当期指定正味財産増減額は△28万6

000円となった。結果として、これら2部を合わせた正味財産増減額は745万7000円の赤字となった。

### 【収益の推移】

会費・入会金について、退会者が入会者を大幅に上回る傾向は継続しており、当年度における正会員数の純減は104名である。このため、受取会費は4772万4000円となり、対前年度比199万3000円の減少となった。

事業収益は、多数の行事中止等により、合計で293万4000円となり、対前年度比1351万3000円と大幅に減少している。寄附金は、当年度は指定正味財産増減の部にも計上されているものを合わせて1935万5000円、対前年度比1109万円の大幅な増加となった。柱であった会員寄附金が回復し、法人・個人からの多額寄附等もあり全般的に増加となった。

### 【事業費と管理費の推移】

事業費と管理費については、総額で7703万円となり、対前年度比1470万6000円、16.0%の減少となっている。冒頭に説明のとおり、令和2年度はコロ



新田理事や関係者30人ほどがリアルで参加

ナ禍により支部・委員会とも事業実施に制約を受け、公益事業については1000万円に迫る事業の中止・縮小が発生した。

事業費について、費目別には会議費が1316万5000円、旅費交通費が371万4000円減少した。これは月例会や催事等の中止が多数生じたことがその要因である。

事業管理費および管理費（間接費）は、一般的な経費節減に努め合計で2333万6000円、対前年度215万7000円の減少となった。

■定款施行細則改正(第3号議案)  
定款施行細則第9条の改正案を

提出し、承認された。

1項の改正…「第9条 定款第25条に規定する役員は、連続して2任期を超えて選任することができない」に「ただし、2任期目に初めて会長に選任された理事は3任期目の選任をすることができるとする」を加える。

2項の改正…理事の定年を満70歳から73歳に引き上げる改正をした。

■令和3・4年度役員(理事・監事)案の選任(第4号議案)

以下の理事候補者、監事候補者が選任された。

【理事候補者】

〈再任〉坂井広志(8798)、山本宗彦(9217)、清水義浩(11907)、古野淳(12194)、飯田邦幸(12207)、萩原浩司(13057)、柏澄子(13088)

〈新任〉橋本しをり(9295)、松原尚之(10507)、松田宏也(11748)、平川陽一郎(12427)、久保田賢次(13011)、

川瀬恵一(14424)、長島泰博(15418)、南久松宏光(16785)

【監事候補者】

黒川恵(7547)再任、佐野忠

則(12887)新任

《報告事項》

■令和3年度事業計画・予算案

令和3年度は公益社団法人に移行して10年目になる。移行したことで社会的信頼を得て、他団体や自治体などとの協働や寄附金を受けられる環境が整った。また、自然保護活動や社会貢献活動が存在感を取り戻した。

【事業計画基本方針】

(1) コロナ禍での活動維持・感染防止をしながら活動維持を検討していきたい。

(2) 入会者を増やす…登山教室などを行なって、入会者を増やしたい。

(3) 「全国山岳古道調査」の推進…自治体などとも協力し、推進していく。

(4) オンライン会議システムの活用…オンラインでの会の活性化、円滑化を図っていく。

【予算概況】

令和2年度の日本山岳会における諸活動は、いわゆる「自粛要請」に従い、中止や延期あるいは規模縮小といった対応を取らざるを得ず、本会の事業遂行は当初の想定

をはるかに下回る結果となっている。このような状況を踏まえ、令和3年度予算は「登山活動の維持」と「入会者の拡大」を方針とし、事業計画が円滑に推進できる体制を確立すべく策定した。

収益は、会員数の増加策を従来にも増して実施することで会費収入を増加させることとした。寄附金については、昨今の経済情勢が特に悪化していることから微減と想定している。一方、費用については、令和3年度中の事業活動がコロナ禍による制約が生じる可能性もあるが、速やかな再開を目指して通常運転としての予算計上を心掛けた。また、支部予算については、令和2年度予算の未消化分の繰越利用も認めており、支部事業の早急な復活・活性化を支援する。

その結果、令和3年度予算は経常収益1億702万6000円、経常費用1億593万5000円、当期経常増減額および当期一般正味財産増減額は109万1000円と、若干の黒字となる見込みである。

■その他の報告事項

◆創立120周年記念事業(飯田

理事・近藤理事)

①グレート・ヒマラヤ・トラバース…第2回についてはコロナの感染状況を見ながら待機。②エベレスト登頂50周年記念事業…昨年未だにオンライン講演会を行ない、東京都板橋区の植村冒険館で写真展を開催した。兵庫県豊岡市の植村直己冒険館では現在、写真展を開催しており、延期したフォーラムも10月に開催の予定。また、写真による冊子を作成した。③所蔵の資料・書籍のデジタル化…会報「山」「山岳」「蘭花譜」、「遠征隊報告書」などをデジタル化し公開している。④日本・エクアドル合同登山…延期されていた来日が本年9月に実現する見込み。⑤ヒマラヤ・キャンプ…オンラインによる勉強会など以外は進捗なし。⑥山の天気ライブ事業…秋に関西支部での開催を計画。⑦『日本山岳会人物誌』…準備中。⑧全国山岳古道調査…3月に推薦を締め切り、4月に120選のうち第1次として59道を決定。監修者を依頼。パイロット版やチラシを作成中。

■質疑応答(要点のみ記載)

事前に会員から質問、要望、提案をいただいた。紙面の都合上、

ここでは質問の概要だけを記す。回答についてはHPを参照してほしい。

質問1…登山振興事業の④安全登山の推進事業報告の中で、「比較的計画どおり」に行なわれた事業の内容。

質問2…YOUTH CLUB 委員会です使われている事務の有償委託について。

要望1…YOUTH CLUB 委員会、青年部の運営のあり方について。

要望2…YOUTH CLUB 委員会の決算書の公開と予算増額について。

提案1…山の異変などの通報や周知について。

提案2…相続会員制度の導入について。

提案3…文化としての山を重要視してほしい。

提案4…会費を安くするため、会報を少なくする。

〈チャットでの質問〉

野口いづみ会員(12105)…会員数減少の対策として止まり木が必要ではないか。同期会結成が推奨されていたが、現状は？また、東京区部の支部の設立も有効

では？

永田常務理事…同期会設立は1時期、会室の不足などから棚上げとなったが、ここ数年はオリエンテーション時に設立を勧めている。しかし、世話役がおらず、いても人が集まらないのが現状。

坂井副会長…東京区部の支部については検討したい。

神崎忠男会員(6002)…高齢者クラブまたはシニアクラブを考えているか？

古野会長…高齢の方が活動しやすい同好会が必要だと思ふ。応援をしたい。

………

総会終了後、

別室で臨時理事会が開かれ、互選により会長、副会長、常任理事の選出などが行なわれた。ま

た、総務担当理事、財務担当理事の指名、業務執行理事の分担案などが示された。

臨時理事会終了後、総会が行なわれた会議室で前記の発表があり、新理事の自己紹介が行なわれた。(報告)古川研吉、永田弘太郎



臨時理事会終了後、新旧理事・監事がそろって令和3・4年度がスタート

## 支部長が代わりました

### 青森支部 須々田秀美さん

初めて山に登った記憶は、小学校の遠足です。平川市の東方にある矢捨山(564m)という、一等三角点のある山でした。冬はスキー場になっていましたが、今は杉のヤブ山で、登山道もない状態です。

本格的な登山は高校生のときに、先輩に誘われた岩木山です。雪渓を登るのも初めて、山頂から津軽平野を見下ろす眺めも初めての体験でした。これがきっかけで八甲田の山々なども登るようになりました。

東京理科大学Ⅱ部山岳部の4年間で、丹沢や谷川岳、北アルプス、八ヶ岳、富士山など、関東周辺の多くの山々で鍛えられました。個人的には、大学3年のときにインドから陸路ネパールに入り、エベ



青森支部長 須々田秀美さん

レスト街道のカラパタルまでトレッキングをしたことが、いちばんの思い出です。

大学卒業後は八戸工業大学第二高校で数学教師となり、しばらくは山から離れていましたが、そこで同僚となった鹿野松男先生に誘われ、1982年12月に日本山岳会に入会しました。青森に支部はなかったため、岩手支部に所属して岩手の山々を巡り、当時の佐藤敏彦支部長には大変お世話になりました。

1993年11月、初代松島静吾支部長の下、新しく青森支部を設立しましたが、2023年には早くも創立30周年を迎えようとしています。今の青森支部の会員は41名と減少の一途です。また、行事に参加する会員も固定化し、高齢化も顕著ですので、登山を主体にしつつも、あまり体力を必要としない行事なども企画してみたいと考えています。さらには女性会員の確保も大事な施策です。

30周年に向けての取り組みでなんとか活性化を図り、コロナウイルスの感染状況に対応しつつ、できることを探って実行していきたいと思っています。

### 宮城支部 千石信夫さん

山登りは、仙台の中学校に山岳部があったことがきっかけでした。その後、高校・大学と山岳部に所属し、拓殖大学を卒業と同時に1973年、日本山岳会に入会しました。拓殖大学山岳部は、学生部に加盟しており、各大学山岳部との交流がありました。当時の同期の仲間と今でも交流があることは、嬉しいことでもあります。

71年、拓殖大学アフガニスタン・ヒンズークシユ遠征隊員として参加したとき、ベースキャンプが盗賊に遭い、無念の帰国となったことは今でも悔しい思いがあります。この遠征隊長だった田中弘美は、その後信濃支部長に、そして、登山隊長の菊地修身は岩手支部長となりました。我が山岳部から、私を含めて3人の支部長を輩出したことになりました。



宮城支部長 千石信夫さん

宮城支部には79年から所属し、93年からは事務局長を10年間、2005年から支部長を4年間務めました。この間、本部はもちろん全国の支部の皆さんと交流ができたことは、私の人生において大変有意義な時を過ごすことができたと思っております。

会員の減少と高齢化については、以前からの課題ではありますが、高齢者が多いのは悪いことではありません。JACの方針である入会者を増やすことに重点を置いて、行動しているかと思っております。そのためには、まず我々支部会員が山を楽しんでいること、魅力のある支部となることが重要であると思います。

再び支部長に就任することには、少々複雑な思いがあります。私が初めて支部長に就任した05年は、いちばん若かったように思います。次はもっと若い適任者がいれば、と考えさせられたことでした。老体に鞭打って、もうひと頑張りしなければと思います。さらに、今後出会う会員の皆さまとお会いすることを楽しみにしたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

## 支部長が代わりました

### 群馬支部 根井康雄さん

初めての山は、中学校山岳部の白砂山周辺を歩いた夏山合宿。12歳の夏、野反湖畔の山小屋をベースに、ほんの一部だが、現在「ぐんま県稜線トレイル」となった縦走路に足跡を残していた。そして、大学生になって社会人山岳会に入会。谷川岳の壁や沢を登り始めてから50年近くになる。

岩と雪から縦走、ピークハント、そして低山へ、谷川からふるさとの山・赤城へと目指す山も変わってきた。仕事や家庭の事情などで山への熱量に波があったが、どうにかここまで山を続けてきた。地元新聞社に職を得、出版畑在籍時には山の本を数多く担当してきた。そして、数年前にはそれらの中の一書の全面改訂に、今度は山岳関係者として携わることができたの



群馬支部長 根井康雄さん

も、山が取り持つ縁だろう。

ただ、これといってめばしい登山歴もなく、強いて言えば、まさに「無事これ名馬」。半世紀を人のお世話になるような事故もなく過ごすことができたのは幸いだった。そんな私が大切にしたいのは「安全」に「楽しく」登ること。年を取るほどに、昔は全く気にもかかなかった斜面も怖くなってきたが、長い登山歴の中で変化してきた「危険感覚」を、後輩や一般登山者に伝えていくのも使命と思っている。群馬支部も順調に新入会員を迎え、2013年の創立当時と比べれば倍以上の規模になったが、改めて安全登山の原点に立ち返ってみたい。

若いころから何人かの先輩や友を山で亡くしてきたが、日本山岳会群馬支部では創立以来、幸いに大きな事故はない。ただ、それは創立当初の会員数も少なく、山行もさほど行なわなかった時期からのこと。60人近い会員となり、毎週末盛んに個人山行届が出るようになった今、この「安全」をどう守り続けていくかが、支部にとつて何よりも大切な課題と考えている。安全で楽しい山を目指して。

### 広島支部 森戸隆男さん

広島支部長を拝命した森戸です。京大山岳部OBで、JACには2007年の入会です。

大学卒業後、京大学士山岳会(AACK)に入会、1982年のカンペンチン峰の遠征隊に参加。翌年、山岳部OBとしてブータンへ。83年秋から広島の本社に入社。入社後も登山は続けていましたが、AACKの梅里雪山での遭難(91年)を境に、距離を置くようになりました。体を動かすことのない生活に肉体は脂肪をため込み、50歳を前に体重は60kgから70kgまで増加。まずいと思っていたところに広島支部へのお誘いがあり、入会した次第です。

当時、広島支部は新聞社主催の登山講座からの入会で会員が増えました。この時期、この会の人たちと悲しみを共有することに



広島支部長 森戸隆男さん

なるかも、という不安は頭の片隅にあっても、現実になるとは想像もしませんでした。

2016年11月に富士山で2名が、翌年の8月に北海道の幌尻岳で3名の会員が死亡するという事故が発生。幌尻岳の事故報告作成に年末までかかり、その後、支部の再建が行なわれました。斎前支部長には、無理を言って支部長を引き受けていただきました。難しい時期に支部を率いていただき、深く感謝する次第です。

事故は二度と御免ですが、若手会員の中には困難な山に挑戦したいという人も増えていきます。一方、経験豊富な会員は減少し、若手の挑戦的な意欲をどう受け止めるか判断に迷うことが多くなっています。支部長として最大の懸念事項です。今一つの懸念は事故後、会員的大幅な減少により支部の財政がタイトになっていることです。したがって、会員減少に歯止めをかけることは急務と考えています。このような状況では、支部の運営は手探りで進めていくことになるでしょう。なにとぞ会員の皆様のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

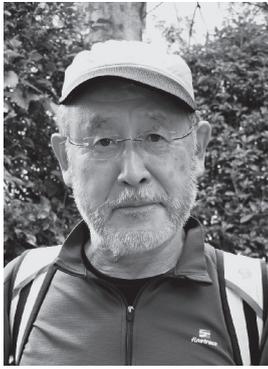
## 支部長が代わりました

## 福岡支部 浦 一美さん

このたび高木荘輔支部長の後を引き継ぐことになりました浦一美と申します。よろしくお願いいたします。

過去の活発な支部活動が行なわれていたところから数十年が経過し、会員数の激減、そして高齢化という状況の中で、今後の支部運営に戸惑いながらも前を向いていこうと思っております。

私は学生時代に登山を始め、卒業後、社会人山岳団体に入り、1973年に初めてネパールのランタン・ヒマールへ入りました。これで運命が変わり、サラリーマン生活を終えると、76年に「山とスキーの店・ラリーグラス」を創業しました。それから45年経過しましたが、その間、福岡県の山岳界は、国内はもとより海外でも目覚ましい活



福岡支部長 浦 一美さん

動を行なってきました。

しかし、押し寄せる時代の波は止めることはできません。特に我々「団塊の世代」が後期高齢者に突入し始めたのです。健康志向の定年退職者で、一時は日本だけではなく海外の山々までも登山者で溢れていましたが、今、その姿は消えてしまっています。また、それを当てにしてきた業界も萎みつつあります。

代わりに若者たちが確かに増えてきましたが、リーダーが存在しないため、長期展望の登山動向や以前の考え方では付いて来てはくれません。

しかし、このコロナ禍で自分と向き合い、心と体の健康への意識が高まり、自らの健康を守ることが周囲も守るといふ社会が広がってきました。「人生100年時代」と言われていますので、この「団塊の世代」をあと5〜6年、80歳まで山歩きを継続させながら、若者たちの邪魔にならないよう、陰になり日向になりながら歩いていこうと思えます。

まずは、日本山岳会創立120周年記念事業を遂行することを第一に進んでいきます。

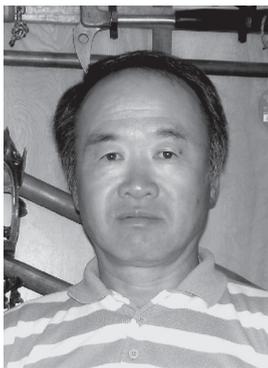
## 東九州支部 安東桂三さん

昭和31年生まれ。大分で生まれ育ち、大分を出ることなく、地元の小中高と進み、地元の大学へ進学。中学生のとき、図書館にあった

山の本を読んで、山の道を目指す。高校に進学すると、担任が山登りを趣味にしていた先生で、その先生の影響で山登りから離れられなくなった。大学に入って山岳部に入部するが長続きせず、途中で退部。2年になり再度、山岳部に入部したが、やはり退部となった。

独りでの山行を行なっていたが、社会人山岳会(大分RCC同人)に誘われ、山行を一緒にするようになった。

1982年、26歳のとき、大分県山岳連盟のチベット・ヒマラヤの未踏峰、ポーロンリ遠征に参加した。その後、当時、東九州支部の事務局長・西孝子さんの勧めで



東九州支部長 安東桂三さん

日本山岳会へ入会した。

このポーロンリのときに、同時にミニヤ・コンカ遠征の市川山岳会・松田宏也さんから、成都で日本酒を1本もらった記憶がある。

基本的に、一生現役の登山をしたいと思う。私の好きな山のジャンルは積雪のある冬山で、自然と対話するなら、自然を楽しむなら、人のいない雪山だと思う。また、75歳くらいまでは、地元九州の比叡山などのクラシック・ルートはリードしたいと思う。

若いときに、日本山岳会に入っていた。入会から39年経ち、本年4月の東九州支部総会で、支部長という大役を引き受けることとなった。

当支部もほかの支部と同様、多くの課題を抱えている。いちばんの問題は、構成員の高齢化。この高齢化由来の課題が多い。山岳会は、山に行くことがいちばん。ハイキングだけでは、若手は入会に至らない。少しは高みを目指し、少しは厳しさを目指すことにより、次第に勢いがつくと思う。

現在の当支部は、若者が入るか否かの限界の位置だと認識、背水の陣で臨みたい。

さんけん通信

## 上高地の巨木は山研の大先輩だった

千石敦司

昨春秋のこと、「山研の建屋に支障のある木を伐採する必要がある、関係者で打合せする予定。君が生業にしている空師の技術が役に立ちそうだから、一緒に見に来ないか」と、山岳部の先輩であり、近年は東海支部の猿投の森づくりの会にて精力的に活動されている和田豊司さんから声を掛けていただき、約15年ぶりに晩秋の上高地へ赴いた。

恥ずかしながら山研に来るのも初めて、上高地の樹木を、興味を持って眺めるのも初めてだった。頻繁に北アルプスへ通っていたこ

ろの私にとって、上高地は人込みばかりの通過点。釜トンネルを過ぎてから興味の対象は岩壁ばかりだった。しかし、樹木に携わって手に触れるものが岩肌から樹皮へと替わった今では、滅多に見られないような巨木たちに視線が釘付けになった。

山研に到着して建屋を一周ぐりと回って、絶対に伐りたい支障木と、それほどではないものを1本ずつ吟味していく。伐採には主に3つの手法があり、根元から切込みを入れて倒す方法（伐倒と言）が一般的だが、建物や電線などの障害物があつて倒

刃物を扱って高所作業をする、空にいちばん近い所で仕事をする人という意味で「空師」と呼んだり、海外では「アーボリスト」という呼称が定着している。

山研までは重機を入れられず、今回は伐倒かつりー・クライミングの二択。伐倒可能な9本の木は猿投のメンバーが担当、それ以外は私が代表を務める「八ヶ岳ツリーワークス」の2名が担当。作業時期は今年のGW明けと決まった。

いよいよ本番。私が担当する木は全部で6本。建屋から見て北西に位置する2本を伐採。その他は建屋南側のハルニレ1本と進入路沿いのイチイ2本を剪定した。ハルニレの樹高は約30m、根元の直径は1m超。四方に大枝を広げる巨木で、建屋側に伸びた約15〜20

mの大枝が懸案。この大枝が折れてしまうと数百kgの重量物として、山研の屋根を直撃する危険がある。よく観察した結果、懸案の大枝を伐り除いて、日射を妨げる枝も上から下まで丁寧に取り除いていけば問題は解決可能、と判断した。

そして、実際の作業では、ハルニレの枝をアンカーにして樹上作業者の安全確保に使うロープ3本と、

建屋に当たらないように枝を制御して吊り下ろすためのロープ2本を駆使。地上から約30m、幹を中心に直径約20mの空間を行き来しながら、2日半かけて全ての剪定を仕上げた。

巨木の樹齢を見積もってみよう。懸案だった大枝は地上約10mの高さから建屋側に伸びていて、付け根の所で直径約35cm。年輪を数えたと約100年は経っているものだった。寒冷な上高地では木の成長はゆっくりで、年輪がぎつしりと詰まった切断面は、長い年月によつて熟成された芸術品のようだった。伐採ではないので根元の年輪を数えることはできないが、少なくとも見積もっても樹齢は150〜200年ぐらいと思われる。

初代から3代目（現在）まで、山研を見守っていたのはもちろんのこと、日本アルプス登山の黎明期には、ウェストン卿や日本山岳会の大先輩たちと同じ空気を吸っていたに違いない。山研の大先輩ともいべきハルニレの巨木と邂逅できたことに感謝したい。

（東海支部会員、北杜市在住）

八ヶ岳ツリーワークスHP

<http://y-treeworks.com/>



懸案だったハルニレの大枝の先端部を切り終えたところ

の障害物があつて倒せない場合は、クレーン車を使うことが多い。そして、重機を使えないときは、ロープを駆使するツリー・クライミングの技術で木に登って、手作業で少しずつ切り刻んでいく。地上から数十mの樹上で

地域発「山の日」レポート⑩東海支部

## 「夏山フェスタ」は山の日制定が追い風に

東海支部 恒成秀洋

私たちは毎年6月、「夏山フェスタ」という登山愛好家のためのイベントを名古屋で開催している。初めて開催したのは2013年。安全登山のセミナーを中心にスタートしたが、山での事故が目立っていたこと、そして、何より「山の日」制定の動きが本格化していたことなどから、回を重ねるごとに規模が拡大している。今後も山の日の意義を踏まえ、登山愛好家たちが正しく山と向き合える情報を発信するイベントにしたい。



第2回夏山フェスタで登壇した谷垣会長(左から2人目)

夏山フェスタのきっかけは、10年ほど前、ある会話の中で「登山愛好家の多くは、漠然とした不安を抱えて山に登っているのではないか」という話が出たことだった。

山岳事故の報道を見ると、遭難者は圧倒的に中高年が多い。しかも、その多くは山岳会などの団体に属していないという。そのため山に関する基礎的な知識は、本やネットからしか得られない。誰かに教えてもらう機会も少ない。

一方、山に登る若い人も目立ち始めていた。『山ガール』という言葉が使われ始めたのもこのころ。当時、私は会社でイベントを担当する部署にいたことから、「山の関連団体などの力を借りて、山に関する勉強の場を提供できないか」ということになった。

タイミングも良かった。検討を始めた12年当時、日本山岳会の会長は名古屋の尾上昇氏。尾上氏に相談し、協力をお願いしたところ、「今、山の団体が協力して国民の祝日『山の日』制定に向けて活動し

ている。機運を盛り上げるイベントになるのではないか」と言っていた。日本山岳会東海支部の全面協力のみならず、実行委員長就任まで快諾していただいた。

尾上氏の指示の下、関係者を訪ねた。この会報「山」の編集人でもある節田重節氏(当時、日本山岳会理事)、「山の日」制定協議会の代表幹事だった成川隆顕氏、そして、昨年亡くなられたが日本山岳ガイド協会理事長の磯野剛太氏。こうした人たちの懇切丁寧なアドバイスの下、私たち事務局はセミナーの組み立てだけでなく、山岳関連の企業や山小屋などを回り、協力をお願いし、13年6月、第1回の開催にこぎつけた。

「夏山フェスタ」のHPから、このときの報告書を見ることができ、開催のテーマは「山の日」制定に向け、山の恵みについて考えよう。セミナーは2日間で10講座。出展者は山小屋や企業など合わせて35小間。良くて3000人と見込んでいた来場者は、初日だけで2800人を超え、2日間では4600人を数えた。中部地区にいかにか登山愛好家が多いかということをも、改めて知る思いだった。

手ごたえを感じた我々は、翌年の2回目は会場を拡大し、セミナーの数も大幅に増やした。このときは、全国「山の日」制定協議会(現・全国山の日協議会)の谷垣禎一会長に、山の日の意義について語っていただくことにした。当時、谷垣会長は法務大臣。警備や入場導線などで愛知県警と打ち合わせを重ねた。開催直前には、山の日が国民の祝日として決定するなど機運も盛り上がり、出展者は倍増、来場者も6600人を超えた。

順調に回を重ねてきた夏山フェスタだが、ここ2年、コロナ禍で中止している。しかし、前回の19年には出展者が1000を超え、来場者数も9000人に迫るなど、中部地区の登山愛好家には一定の認知をいただいているのではないかと自負している。

これからも山の日の意義を伝え、多くの人が安全に山に親しむ機会を提供できるイベントになれば、と思う。一方で、コロナ禍のため山小屋はじめ多くの山岳関係者に様々な影響が出ている。そうしたことも、夏山フェスタを通じて正しく伝えていきたい。

(中部経済新聞社社長)

連載■島の山旅への誘い⑦  
安芸群島

—火山、古鷹山、安芸小富士、弥山など

広島支部 田川宏規

安芸群島の山概説

安芸灘の北方、広島湾に包み込まれるように浮かぶ島々が安芸群島である。東から順に情島、倉橋島、鹿島、沖野島、大黒神島、能美島、江田島、似島、厳島(宮島)、阿多田島などの群島で、広島湾が誇る多島美の主役となっている。

海のイメージが圧倒的に強い瀬戸内海だが、意外にも、小粒ながら魅力的な名山が島々に点在して



火山山頂から望んだ瀬戸内海の多島美

いる。ちなみに、公益財団法人日本離島センターが選定した「しま山100選」には、倉橋島・火山(408m)や江田島・古鷹山(394m)、似島・安芸小富士(278m)、厳島・弥山(535m)が選ばれている。

倉橋島は、広義では瀬戸内海の芸予諸島に属する島の一つで、面積69・47平方km、人口約5400人。音戸の瀬戸に架かる音戸大橋で本州と、早瀬瀬戸に架かる早瀬大橋で江田島市と、そして、鹿島大橋で鹿島とつながっている。

1890(明治23)年、呉に鎮守府が置かれると、大日本帝国海軍の秘密基地としての様相が強くなり、要塞地帯法により軍関係の施設が多く建設された。そもそもこの島は古来、船大工を多く輩出する造船の島として知られ、風待ち潮待ちの島として栄えた。また、明治時代から石材業も盛んで、国会議事堂の2階以上の外壁は、この

島の桜御影石が使われている。

火山は島の中央にそびえており、島が瀬戸内航路の要所であったため、山頂で火を焚いて灯台の役目として、水軍の狼煙台があったことからその名がある。

このほかには古観音山(248m)や岳浦山(491m)、千本岳(164m)などが挙げられる。

江田島は広島湾にある島を市域とし、面積100・70平方km、人口約2万2000人。

主たる島は江田島および能美島(西能美島、東能美島)で、これらは地続きである。このほかいくつかの島がある。かつて大本営が置かれたこともある「軍都」広島市と、四大鎮守府の一つ呉市に挟まれた立地から、戦前より日本軍、特に海軍の拠点となっていた。現在も海上自衛隊の第一術科学校(旧・海軍兵学校)ほか数多くの施設が存在する。

古鷹山は島の北部に位置する江田島のシンボルで、第一述科学校の背後に屏風絵のごとくそびえている。「古鷹」の名はその昔、嵐で



難破寸前の小舟を1羽の大鷹が江田島湾内に誘導して助けたのち、山中に姿を消したという伝説からとも言われる。

似島は広島市南区内で、市域の最南端に位置し、広島湾内に浮かぶ。広島市内の島としては最も大きく面積3・87平方km、人口約750人。広島港と似島港はフェリーでつながる。江戸時代には、荷継ぎの港として栄え、「荷の島」と呼ばれていた。

安芸小富士は、島の南側の下高山(203m)とともに並び立ち、名前のとおりミニ富士山型の優美な姿を見せている。

島の中央部にそびえる弥山は、大同元(806)年、弘法大師・空

厳島は瀬戸内海西部、広島湾の北西部に位置し、廿日市市宮島町に属する。面積30・39平方km、人口約1600人。通称は宮島と呼ばれ、また「安芸の宮島」とも言う。日本三景の一つでもあり、宮島・厳島神社は世界文化遺産に登録されている。



海により開かれた霊山で、真言密教の修験道場となった。

主な山の登山ガイド

▲倉橋島・火山

火山へは車か、JR呉駅からのバス(約1時間、桂浜(下車)を使うことになるが、便数は極めて少ない。砂浜の美しい景勝地・桂浜の登山道は整備され標識もあり、山頂付近には展望台やトイレも整っている。標高250mくらいから急登となるが、登山口から山頂までは2km、1時間20分くらいで登れる。山頂の巨石から見る360度の瀬戸内の絶景が実にすばらしい。春には、周囲の山々に山桜が咲き誇り、その景色も登山者を和ませる。初日の出時には、車で山頂近くまで行ける利便性から混雑する。登山口周辺には桂浜温泉会館があり、民宿、カフェなどが点在する。

なお、島を南北に縦断する防火帯道に並走して広島湾岸トレイル(以後、HWT)No.21コースが設定



第一術科学学校のキャンパスと古鷹山

されている。

▲江田島・古鷹山

古鷹山へは、広島港(宇品港)から高速船(22分)か、呉港からフェリー(20分)、または音戸大橋、早瀬大橋を経由して車で小用港となる。港からいちばん近いのが切串港に通じる舗装された林道を北西に登り、標高90m付近で左折して、春にはワラビの群生する山道に入る。さらに高度を上げ、反射板(標高330m付近)を左折し尾根道に入ると、間もなく三角点がある376m峰に着く。その先140mくらいで奥小路登山口ルートに分岐点があり、そこを直進する。ここからは標識が設置されており、



元宇品海岸から見た安芸小富士

いづれの道も良く整備されている。山頂は案内板や旧海軍兵学校の自戒訓である「五省」に関する看板などがあり、瀬戸内の絶景が東西南北360度に渡り堪能できる。海上自衛隊・第一術科学校も眼下に見える。小説『坂の上の雲』にも登場する広瀬武夫海軍中佐も100回以上登ったという逸話「古鷹山登り」の学生の一団に出会うこともある。小用港から山頂までは4・7km、1時間40分くらいで登れる。なお、第一術科学校に近い奥小路登山口からは標識もあり、良く整備された2kmの道のりを約1時間20分で登れる。その他の山としては、古鷹山か



安芸小富士から見た似島南部と厳島(右奥)

ら連なるクマン岳(400m)や超絶景の天狗岩がある陀峯山(438m)、キャンプ場がある真道山(286m)、江田島最高峰の野登呂山(542m)、日露戦争当時の砲台堡塁跡のある砲台山(402m)がある。いずれも瀬戸内の多島美の絶景が、登山道でも山頂でも堪能できる。

#### ▲似島・安芸小富士

安芸小富士は島の北側にある。広島市内には富士見町の名が残り、昔は遠望できたらしい。

広島港〜似島港間は、フェリーでつながる(20分)。港に降りるとすぐに左折し、標識に従って右折すると島特有の家と家の間の狭い



厳島神社のある厳島港と弥山

路地道を進む。細い舗装された道を登ると下高山への分岐があるが、左方面の竹林を抜けてさらに高度を上げていくと、島の南側全体が見渡せる絶景ポイント(標高250m)の岩場がある。さらに高度を上げると山頂となり、山頂から北側の広島街並み、その先には遠く西中国山地の山々が霞む。もちろん、東に江田島、南に厳島を含む瀬戸内海の多島美を一望できる。登山口から山頂までは1.8km、50分くらいで登れる。

このほかには島の南端に下高山があり、この2山は似島港〜安芸小富士〜203m峰〜似島港の周回縦走路を形成している。

#### ▲厳島・弥山

弥山へは、大野瀬戸をフェリーで渡る(10分)。宮島栈橋から南西に海岸沿いを進むと、海に浮かぶ朱色の大鳥居や厳島神社がある。さらに進むと弥山への3ルートの一つである大元公園登山口に到着。

標識もあり、登山道は良く整備されている。大元公園から延々と続く石段の参道を登り切れば、山頂広場に到着。登山口から山頂まで3.2km、2時間くらいで登れる。山頂広場にある展望台からは、

波穏やかな瀬戸内海の多島美や遠く霞む四国の山々が望める。また、山頂には巨石群もある。

そのほか駒ヶ林(509m)があるが、どちらも3本のルートから登ることができる。宮島では多発する観光客の遭難防止のため、弥山への登頂は①紅葉谷(ロープウェイあり)、②大聖院、③大元公園の3ルートに限定している。①②は所要1時間30分〜2時間、③は2時間〜2時間30分。

#### 山旅のメモ

瀬戸内の島々をめぐる山旅だけに、山歩きだけでなく周辺観光も含めてトータルに楽しみたいもの。

江田島・小用港から国道487号を1kmほど西に歩けば、第一術科学校がある(バス便もある)。校内施設の見学や歴史などの案内があり、ガイドによる戦中悲話には胸を打たれる。R487の学校の手前に「江田島市観光協会」があり、江田島6山のマップや観光、宿泊の案内・紹介のサービスを受けられる。また、山案内は「江田島トレッキング倶楽部」がある。

なお、江田島には早瀬大橋から切串港へのHWT No.23(陀峯山)、24(真道山)、25(第一術科学校展望地)、26(古鷹山、クマン岳)コースがあり、加えて能美島にはオプシヨン・コース(野登呂山、砲台山)がある。

似島へのフェリー(似島汽船)には登山道マップが置かれており、栈橋付近に売店が、島の東側には宿泊可能な「似島臨海少年自然の家」がある。HWT No.28コースが島を周回する。

宮島栈橋には「宮島観光協会」がある。また、山案内(観光案内付き)は「宮島弥山を守る会(大聖院内)」が担当する。HWTとしてはNo.18の周回コースがある。

(広島湾岸トレイル協議会会長)

# 支部



## だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

### 千葉支部

#### 本部と合同で観察会

##### ― 貴重な食虫植物群落 ―

山の自然学を通して、自然学活動や自然保護についての提言などを目標としている、日本山岳会本部の自然研究グループ「山の自然学研究会」（通称・やま学研、源原重行代表）と千葉支部「自然学クラブ」（三木雄三代表）の総勢20人が、6月5日、千葉県の九十九里平野に残された「成東・東金食虫植物群落」を訪れ、ちよと見ごろを迎えているモウセンゴケやイシモチソウなど、貴重な植物を観察した。

本部のクラブと地方組織の支部が合同で活動するのは珍しく、「やま学研」の源原代表は「会員の高齢化などもありクラブ単独での活動が難しくなってきた今、地方と手をつないで定期的に活動できれば会の活性化につながり、これ

からの運営に期待が持てる」。千葉支部も「本部の活動を知る良い機会」と話している。

千葉支部の自然学クラブは「だれもが参加できる自然観察会を公益活動として開催することで、山や自然に興味を持ってくれる人を増やし、支部活性化につなげよう」と2019年4月に発足。リアス海岸のある勝浦市の鵜原理想郷や



食虫植物群落を見学する参加者(千葉県・山武市)

寄附金および助成金などの受入報告  
(令和3年5月31日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
向井 成司 会員	10	日本山岳会運営費用
神長 幹雄 会員	100	エベレスト登頂50周年記念 フォーラム事業費用
坂口 三郎 会員	500	日本山岳会栃木支部活動支援
本間 宏之 会員	10	高頭仁兵衛翁寿像碑修復募金
池本 順平 会員	10	高頭仁兵衛翁寿像碑修復募金
一万円未満 2名の氏名省略	-	高頭仁兵衛翁寿像碑修復募金

カタクリ群生地のある千葉市の昭和の森など千葉県内や、多摩川の流れる大地の崖を削った国分寺崖線、マグネットが吸い付く不思議な凝灰岩のある丹沢、さらに富士山の溶岩が延々30kmにわたり流れた大月市の猿橋溶岩などの巡検を続け、この間、一般参加してくれた人を支部の会友に勧誘してきた。自然学クラブの巡検がちょうど10回となることや、食虫植物群落が増産計画の天然記念物に指定され100年を迎えたことで、千葉支部から「一緒にどうですか」と呼び掛け、合同での開催が実現した。雨の季節を迎えて群落の食虫植

表題が示すように本書は、ユネスコの世界自然遺産に登録されている白神山地の入山禁止問題がテ



2021年4月出版  
無明舎出版 244頁  
四六判 1600円+税

秋田・白神入山禁止を問う

佐藤昌明著



図書紹介

物も見ごろ。白い花が可愛らしいイシモチソウや湿地の穴の内側に張り付くような茶色のモウセンゴケに参加者の目は釘付け。接写レンズのカメラを地面にこすり付けるようにしながら、夢中でシャッターを押していた。こうした食虫植物の群落は、かつては茂原や南九十九里の一宮あたりまで点在していたが、コメの増産計画による圃場整備の埋め立

てで壊滅。「成東・東金食虫植物群落」が唯一残った。参加者たちは、群落からほど近くにある政男と民子の淡い恋を描いた小説、『野菊の花』作者の伊藤左千夫の実家や、縄文時代はまだ海だった波打ち際の砂岩を土台に建てられた珍しい「波切不動」なども見て回り、有意義な初夏の巡検を楽しんだ。

(前支部長・三木雄三)

1マダ。同山地の中核地帯が我が国初の世界自然遺産に登録決定したのは、今を遡る28年前の1993年。以来、青森・秋田の両県に跨る同一の山域でありながら、両県で食い違った管理体制がとられている。青森側は届け出制、秋田側は学術調査以外、入山禁止。なぜ、こうした奇妙な事態になったのか。それは遺産登録に至るまでの、同山域を巡る自然保護運

動のあり方に起因する。元はと言えば、秋田側で計画されたブナ林伐採計画が発端だった。計画は政治絡みで青森側に持ち掛けられた。両県の地元町村を巻き込み、「経済文化交流」という名目で促進期成同盟会が結成されたのが1978年。その4年後の82年、伐採目的の「青秋林道」が着工、同時に両県で反対運動が起こる。結果、反対派が全面的に勝利したのだが、勝因を述べれば、青森側の地元、赤石川流域住民が、漁民も加わり決起したことにある。山と川と海とが一連なりになって地元住民の生活基盤をなしているとの認識が地元住民の運動を支えていた。新聞社をはじめ、各マスコミが反対派の視点に立つて報道し、時流を味方に付けた効果も無視できない。反対運動の方法やビジョン、山に対する考え方、捉え方においても両県の自然保護派の間で大きな食い違いが見られた。山の自然に分け入り体験的に通じている者と、そうでない者との違いである。その後の世界遺産を巡る維持管理体制にも、この違いはあからさまに反映されている。

世界遺産登録以降、立看板を各所に設置し、入山禁止を強制したのは当該旧営林局である。法的根拠もなしに、こうした一方的な入山禁止措置を講じたのは、林道建設やブナ林伐採に反対した自然保護派に対する意趣返しとも伝えられている。秋田側の自然保護派はこれに同調し、青森側では断固反対を貫いた。

ところが本書を読むと、当時、入山禁止を主張していた秋田側の自然保護派も、そんなことは言った覚えがないと、今になって一様に白を切っているのだが、誠にもってこれは無責任であり、見苦しい。

本書の著者は定年を迎えた元新聞記者である。反対運動が始まった翌年(1982年)、初任地が青森支局だったことからこの問題に関わった。林道建設が中止になるまでの足掛け7年にわたる一連の流れを通じて、「天王山の戦い」とも言われた地元、赤石川流域住民による連日の決起集会に立ち合えたことは、本書にあるように、まさに「記者として幸運だった」と言えるだろう。住民の意志を目的の当たりにしたのである。

それにしても、白神山地の世界遺産地域を巡る行政主導による旧態依然とした維持管理体制は、見直されなければならない問題である。著者はその日が来ることを切願しているように思われる。顧みれば、反対運動は30年以上も昔の出来事であり、世界遺産に至る経緯が忘れ去られつつある現在、出版の意義は大きいと言わざるを得ない。

(根深誠)

## 吉野と大峰

森下恵介著



2020年8月出版  
 東方A5判 250頁  
 3800円+税

山を歩く人ならだれでも知っている山岳古道、奥駆道。日本の修験道の聖地であり、シンボルでもある修業の道である。その中には日本百名山の一つ、大峰山(山上ヶ岳)があるから、一部でも歩いたことがあるという人は少なくはないだろう。

奥駆道を全てたどる機会には恵

まれていないが、かく言う私もその一部を何度かつまみ食いしたうちのひとりである。そのときに心に残ったのは、なんて奥深い所なんだろう、という印象である。奥駆道が貫く稜線から眺めると、どの方向にも果てしなく山並みが続いている。黒い森をまとった地形の起伏が、大海原のように果てしなく続いているのは壮観だった。

しかし、平安時代の昔から、このような奥深い峰々の中を、成仏を目的に自らを錬磨しながらたどる修験者や僧がいたのである。

本書は、そのような山岳古道に考古学的なアプローチから迫った本である。

考古学というتماず思い浮かぶのは、建物の建設予定地などで土を掘りながら何かを調べている姿である。イメージとしては地味で、我々の生活とは縁遠い、マニアックな世界。携わる人の職業は教員、博物館の学芸員、市役所の文化財担当と、およそ派手な世界とは縁のない地道な人たちである。

おそらく、利益重視の今の世の中では、あんな仕事は必要ないとか、あの人たちは世の役にも立たないのに、いったい何をやってい

るのだろうか、的外れな批判を受けることも多いだろう。

確かに考古学が、直接私たちの生活に関わってくることはないが、はるか昔、そこに何があつて、どんな日常生活が営まれていたかを研究することは、今の日常がどのようなにして成り立ってきたかという命題を知るといふことにほかならない。

ただ、そうは言っても、考古学が我々にとって縁遠い世界であることに変わりはない。

奥駆道の本ということで図書館紹介を引き受けたが、本書を見ると私にとつては縁遠い学問である考古学の論文集である。「しまった」と思ったが、意外に読むのはそれほど苦にならなかった。確かに本書の中身は奥駆道を調査研究した論文集だが、第一部が考古学的なアプローチではあるが、ガイドとしても使える奥駆道のルートとポイントの解説になっている。さらに先を読み進めていくと、山々が重畳と連なる最奥の山中になんと多くの建造物が建ち、人々による営みがあったのが明らかに。それはどこか感動的でもある。

(近藤雅幸)

山田圭一著

プロフェッサー世界を翔ぶ  
山と空に逝った仲間たちに



2020年12月  
クレオ A5判 207頁  
2500円+税

書名のとおり、著者は社会学系の元大学教授。大学そのものの研究や様々な境界領域に取り組んできたと言う。山岳航空写真のパイオニアとして、世界で初めてエベレスト南西壁を撮影し、新ルート選定に役立ち、アルピニストから評価されるなど、軽飛行機をチャーターして世界中の高峰を空から撮影することが、著者のライフワークだ。

本書は世界の旅や山行、撮影、飛行機などに関するエッセイなど、5章建てで構成されている。その中でやはり興味を惹かれるのは、「世界の高峰を翔ぶ」と題された第3章である。山岳航空写真も多数掲載されている。

セスナで飛んだ富士山は、1967年の『世界写真年鑑』にも掲載され、代表作の一つとなった。ヨ

ロッパ・アルプスの三大北壁のクローズアップや、周囲の山々に隠れて全容が現われにくいフィンスタールホルンなども本や雑誌に掲載される。その後もアラスカやカナディアン・ロッキー、ヒマラヤ、アンデス、カラコルムと著者の撮影の旅は続く。

撮影の成功は気象条件だけではない。世界各国のカメラマンが成功できなかった、エベレスト南西壁の正面からのクローズアップが撮れたのは、ヒマラヤを飛びたいと休暇を取ってカトマンズに来ていた、エア・フランス乗務員パイロットのリスク知らずの飛行のお陰だったと言う。危険の多いフライトを引き受けてくれるパイロットの腕によるところが大きいのだ。8000m級の山では酸素ボンベのお世話になるが、ボンベからマスクに延びているチューブを引き抜いてしまい意識を失ったこともあったが、パイロットの応急処置のお陰で無事に生還できた。

高所障害との闘いのほかにも、山岳航空写真の撮影には苦勞が多い。窓を開けた際の風圧対策や低温対策。乱気流に捉まったり、軽い凍傷になってしまうこともある。

酸素不足で無理をし過ぎると、後でどんな後遺症が出てくるかわからない。しかしながら、著者にとっては、ロック・クライミングやアクロバット・フライトと同様に、山岳航空写真に取り付かれてしまつては、付ける薬のない強力な魅力が具わっているようだ。「未知の分野に挑戦するというパイオニア精神はアルピニストと研究者、そしてまた危険なフライトをつづける山岳パイロットたちに共通の特質である」と著者は述べている。

(木根康行)

ベア・ウースマ著  
ヘレンハルメ美穂訳

北極探検隊の謎を追って  
人類で初めて気球で北極点を目指した探検隊はなぜ生還できなかったのか



2021年4月  
青土社 316頁  
A5判 2200円+税

サロモン・アウグスト・アンダーレーを隊長とする3人の冒険家は1897年7月11日、大勢の人が見守る中、気球で北極点に向けて

飛び立った。しかし、海上に出た途端に急降下してしまう。3人は重りの砂袋を捨てるが、重りであり、方向をコントロールするために必要な長いロープまで外れてしまい、今度はどんどん上昇して皆の視界から見えなくなってしまうた。

途中、彼らが放った伝書鳩が無事飛行を続けていることを伝えるが、それ以来ぶつくりと音信が途絶えてしまうのだ。

「1年ぐらい私たちの音信がなくても決して心配しないように」とアンダーレーは出発前に言っていたが、以後、この探検隊の行方には色々な憶測が飛び交うことになる。

そして、なんと33年後の8月にたまたまクヴィト島に立ち寄った猟師が、彼らの遺品を発見するのだ。遺品の中には、日記やカメラもあり、そのフィルムは現像可能だったので、初めて行方不明だった間のことがかつてきた。

それによると、飛び立って3日後には水素ガスの漏れからこれ以上飛行を続けられなくなり、氷上へ着陸してしまったのだ。そこから苦難の連続で、やっとクヴィト島を見付け上陸しようだ。しか

し、それからの行動が不明なのだ。現在、3人の死因の定説となっているのは、旋毛虫症で衰弱して亡くなったというものだ。シロクマの肉を生で食べるとそうした病気になることが知られている。

私は、極地探検に詳しい横山厚夫さんからもアンドレー探検隊に関する昔の本を数冊お借りして読んだ。それにも探検隊の死因は旋毛虫症とあった。

本書の著者ベア・ウースマさんは、イラストレーターだったが、途中で医大に入り医者になった人だ。スウェーデンでは、アンドレー探検隊のことは子どもでも知っているようだ。この著者が12歳のときに「旋毛虫入り」という曲を姉と作っているのには笑ってしまう。彼女は大人になってからアンドレー博物館を訪れる。そのときのことを「探検隊の装備を目にした私に何か起きた」と書いている。そして、この探検隊の最大の謎、クヴィト島に上陸してから3人が亡くなるまでを解き明かそうと調べ始めるのである。

彼女は解剖所見も調べる。その解剖所見の書類は、博物館の地下室にあった資料の中から彼女が見

付け出したものだ。解剖所見から推理することは、これまでだれもやっていなかったのだ。

今なら遺体が少しでも残っていたら、分析が可能だろう。しかし、アンドレーはスウェーデンでは急進的な火葬主義組織に入っていたようで、遺体は火葬されてしまっていたのだ。

わずかに残された物からの分析の仕方は、さすがお医者さんだ。また、イラストレーターとしての腕も役立つ。彼女が描いた現場の見取り図からは、ほかの人たちが見過ごしていたことが見えてくるのだ。残された日記からは記録にある事柄を一覧表にまとめ、そこから分かることを右端にコメントとして彼女は書いている。

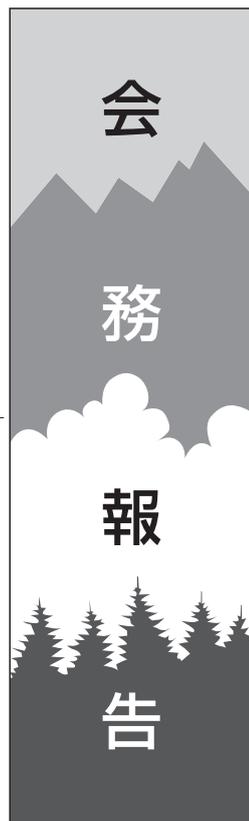
3人の死因についても、最初から決め付けるのではなく、12項目の可能性について、それが考えられる根拠、考えられないとする根拠、そして、彼女の考えを並べるという方法でまとめられている。

そして、最後の4ページに彼女が考えた探検隊の最後の場面が書かれるという構成に、この本はなっている。

この本は、著者と一緒に残され

た足跡をたどりながら推理を積み重ねていって、最後に謎解きの場面に会おう推理小説のように読む

(北島洋二)



### 令和3年度第3回(6月度)理事会 議事録

日時 令和3年6月9日(水) 19時

00分

場所 集會室およびオンライン

(Zoom)

【出席者】古野会長、野澤・山本・

坂井各副会長、永田・古川・

萩原各常務理事、安井・清

登・清水・飯田・柏・近藤

各理事、石川・黒川各監事

【オブザーバー】野口東京多摩支部

支部長、節田会報編集人

#### 【審議事項】

- 1・青森支部より支部長交代の申請があり審議した。(賛成15名、反対0名)(永田)
- 2・宮城支部より支部長交代の申

請があり審議した。(賛成15名、反対0名)(永田)

こともできる本なのだ。

請があり審議した。(賛成15名、反対0名)(永田)

3・群馬支部より支部長交代の申請があり審議した。(賛成15名、反対0名)(永田)

4・広島支部より支部長交代の申請があり審議した。(賛成15名、反対0名)(永田)

5・東九州支部より支部長交代の申請があり審議した。(賛成15名、反対0名)(永田)

6・福岡支部より支部長交代の申請があり審議した。(賛成15名、反対0名)(永田)

【報告事項】

- 1・東京多摩支部の事故について報告があった。(古野、野口)
- 2・正会員19名、準会員11名の入

部員11名、準会員11名の入

会を承認した旨、報告があった。  
(古野)

3・7件の寄附金等受け入れがあった旨、報告があった。(古川)

4・通常総会と理事会の開催内容について報告があった。(古野、永田、栢)

5・評議員懇談会を開催した旨、報告があった。(永田)

6・海外登山助成委員会の進捗状況について報告があった。(坂井)

7・山岳研究所の消防設備点検結果について報告があった。(安井)

8・6支部について事務局長が交代した旨報告があった。(永田)

9・YOUTH CLUB委員会  
の予算と装備の保管について報告があった。(野澤)

10・資料映像委員会の委員長が交代した旨、報告があった。(清水)

11・ユースクラブOB会が解散した旨、報告があった。(栢)

12・令和2(2020)年度の会員  
動向について報告があった。(古野)

13・令和3(2021)年度の新永  
年会員について報告があった。(古野)

14・令和3(2021)年度の会費  
滞納による除籍予定者について報

告があった。(栢)

15・緊急事態宣言中のルーム利用  
について報告があった。(栢)

16・安曇野山岳美術館から「山岳  
画最高峰二人展 吉田博展・足立  
源一郎展」について後援依頼があ  
った旨、報告があった。(永田)

17・全国山の日連絡協議会に関し  
て報告があった。(古野)

18・クラリスのブログで、本会の  
コンピュータシステムが紹介され  
た旨、報告があった。(永田)

19・HATJ 記念式典開催と  
解散について報告があった。(栢)

20・国立登山研修所の夏山研修会  
開催のお知らせがあった旨、報告  
があった。(栢)

21・静岡森林管理署から「富士山  
地区国有林におけるニホンジカ獐  
銃による捕獲実施」に関して通知  
があった旨、報告があった。(栢)

22・令和3(2021)年度役員担  
当案について報告があった。(古  
野)

23・「山」6月号の発行について報  
告があった。(節田)

# ルーム日誌 6月

1日 総務委員会

4日 総務委員会

7日 総務委員会

8日 総務委員会

9日 理事会

10日 総務委員会

11日 総務委員会 図書委員会

14日 総務委員会

15日 総務委員会

17日 総務委員会

21日 会報編集委員会

22日 00会 フォトクラブ

25日 緑爽会

28日 スケッチクラブ

29日 財務委員会

6月来室者 63名

## 会員異動

## 物故

酒井忠正(10702) 21・6・14

## 退会

石垣政雄(6446) 山梨

熊本道夫(12149) 埼玉

伊達芳文(12354) 関西

山下秀一(13591) 埼玉

市川 一(13674) 埼玉

小林建夫(14321) 広島

上岡晴美(14392) 広島

河合明宣(14447) 群馬

聲高健吾(15371) 静岡

聲高一枝(15372) 静岡

藤條春夫(15680) 茨城

平出和也(15839) 静岡

志太みちる(15991) 静岡

青木宏典(16565) 広島

矢野誠一(A0288) 広島

I N F O R M A T I O N

インフォメーション



## ◆秋の北八ヶ岳

山行委員会

秋の八ヶ岳を歩いてみませんか。  
紅葉と温泉を楽しみながら八ヶ岳

を横断します。

日時 10月3日(日)～5日(火)

集合 10月3日(日) JR茅野駅改札

9時10分

行程 3日(日) 茅野駅Ⅱ(タクシ

ー)桜平駐車場ー夏沢鉱泉  
ーオーレン小屋(泊) 徒歩  
約2時間

4日(月) オーレン小屋ー赤

岩ノ頭ー硫黄岳ー夏沢峠  
ー根石岳ー天狗岳ー本沢

温泉(泊) 徒歩約6時間

5日(火) 本沢温泉ーしらび

そ小屋ー稲子湯(解散)  
徒歩約3時間30分

費用 3万円(山小屋代、タクシー、

保険料など)

装備 秋山登山装備一式、昼食2

日分、行動食、寝袋(布団  
カバー)、マスク、着替え

定員 先着8名

申込み 9月18日(金)までに三井賢

治へ

✉sanko@jac.or.jp

TEL 090-740216480

保険加入のため、性別、生年月  
日をお知らせ下さい。また、参加  
者名簿作成のため、会員番号、住  
所、緊急連絡先、電話、携帯電話  
番号などお知らせ下さい。

◆双六岳ー鷲羽岳ー雲ノ平縦走

山行委員会

紅葉の北アルプスを新穂高温泉

から双六岳、三俣蓮華岳、鷲羽岳

祖父岳、祖母岳、雲上の雲ノ平を

通り折立まで、秋の気配を感じ、  
眺望を楽しみながらの縦走に挑戦  
してみませんか。

日程 9月17日(金)～20日(月)

集合 17日(金) 新穂高バスターミ  
ナル6時30分

行程 新穂高バスターミナルーわ

さび平小屋ー鏡平山荘ー

双六小屋(泊)ー双六岳ー  
三俣蓮華岳ー三俣山荘ー

鷲羽岳ー祖父岳ー日本庭

園ー雲ノ平山荘(泊)ー祖母  
岳ーアラスカ庭園ー薬師

沢出合ー太郎平小屋(泊)

ー折立ヒュッテ(10時30分  
ごろ解散)

17日(金) 徒歩約7時間50分

18日(土) 徒歩約8時間20分

19日(日) 徒歩約5時間50分

20日(月) 徒歩約3時間10分  
(健脚向き)

費用 約4万2000円(山小屋

代(3泊)・懇親会費・保険

料ほか)

定員 先着7名まで

申込み 8月20日(金)までに、三枝

光吉へ

TEL 080-662715687

✉sanko@jac.or.jp

\*申込み者には詳細案内をお送り  
します。

◆氷河と温暖化の小冊子

「ちきゅう」を差し上げます

大森弘一郎

私(大森)が代表をしている、地  
球環境の会の会報「ちきゅう」7号  
を差し上げます。当号にはマナス  
ル氷河の変化と、温暖化の報告を  
10ページ載せてあります。A5  
判・カラー・50ページの小冊子です  
が、山仲間に見ていただきたいと  
思い2部を用意しています。温暖  
化に関心をお持ちの方、✉zero@  
qb3.so-net.ne.jp にお知らせくだ  
さい。お送りします。



◆編集後記◆

●新幹線に乗るとき、いつもJR

東日本の車内誌「トランヴェール」

を読むのを楽しみにしています。

真つ先に沢木耕太郎さんの連載

「旅のつばくろ」から読み始めます  
が、6月号は「どちらが先か」と

題して、明治維新の精神的指導者、

吉田松陰の二十代前半における旅  
を採り上げています。

●松陰というと松下村塾で、教育

者としてのイメージが強く感じら

れますが、「旅する若者」でもあつ  
た松陰は『東北遊日記』を著し、そ  
の旅を総括して、『後遠遊す』と、

「学を博くして後遠遊す」と。僕は則

ち遠遊して而る後に学を博くす  
と述べているそうです。日本を飛

び出す若者が少なくなつたと言わ

れる昨今、ぜひ噛み締めてもらい  
たい一言です。(節田重節)

日本山岳会報 山 914号

2021年(令和3年)7月20日発行  
発行所 公益社団法人日本山岳会  
〒102-0081  
東京都千代田区四番町5-4  
サンビューハイツ四番町  
TEL 東京(03)3261-4433  
FAX 東京(03)3261-4441  
発行者 日本山岳会会長 古野 淳  
編集人 節田重節  
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp  
印刷 株式会社 双陽社